

## 今週のメニュー

■ [トピックス](#)

◇ロンドンオリンピックいよいよ開幕 –塩ビターポリンのゆくえ–

■ [随想](#)

◇古代ヤマトの遠景（66） –【継体王家の誕生（2）】–

信越化学工業（株） 木下 清隆

■ [編集後記](#)

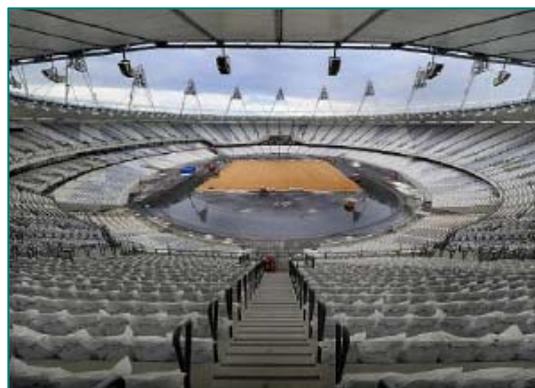
## ■ トピックス

## ◇ロンドンオリンピックいよいよ開幕 –塩ビターポリンのゆくえ–

梅雨も明け、猛暑の夏を迎えましたが、2012年の夏のオリンピックがいよいよ開幕です。時差マイナス8時間のロンドンで活躍するなでしこジャパンをはじめ各競技に出場する選手から、目を離せない毎日が続きます。夏の暑さに負けない、熱い声援を送りたいと思います。

ところで、ロンドンオリンピックの話題は多くのメディアで紹介されていますが、ロンドンオリンピックのメインテーマは「エコ」です。どちらかというと環境問題で開発が遅れていた地区をきれいに整備し、開発に当たっては環境を重視した施工方法や建築材料が選択され、オリンピック終了後の建物の再利用も考慮に入れた設計を行ったなどいろんな面で、高い評価が得られているようです。

以前にも [メルマガ](#) で、オリンピック競技場の屋根材として142,000 m<sup>2</sup>もの塩ビターポリンが使われていることを紹介しました。その広さは、月並みの比較をすると東京ドーム3個分の屋根の広さに相当します。オリンピックとパラリンピックが終わった後には、一時的な使用を目的として建設された建物の屋根材は、回収され、リサイクルされることになっています。その方法は、欧州で開発された一種の溶媒抽出技術によるもので、昨年は、7,500トンの廃棄物を処理した実績を有しています。そして、回収された再生塩ビは、2014年ブラジルで開催されるサッカーワールドカップ会場の屋根材に使われたり、次のオリンピックで使われる計画になっていると、このことで、ワールドワイドなスポーツイベントに使われていく塩ビは、まさに持続可能な材料のシンボルのひとつではないでしょうか!?



ECVM ホームページより

ロンドンオリンピックに合わせて、英国プラスチック連盟が作成した動画では、塩ビが使われた競技会場の紹介や、リサイクルの取り組みなどが紹介されていますので、是非、次のアドレスをクリックしてみてください。

<http://youtu.be/WGNAc5dcX0w>

## ■ 随想

### ◇古代ヤマトの遠景（66）－【継体王家の誕生（2）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

継体天皇は、書紀によれば応神天皇の五世の孫である男大迹王<sup>おおどおう</sup>が、大連の大伴金村・物部<sup>あらかひ</sup>麁鹿火らによって越国の三国から迎え入れられて誕生したことを、前回紹介した。では、なぜ、男大迹王は大伴氏・物部氏という行政官の代表者達に迎え入れられたのかという疑問が出てくるが、書紀にその明確な理由は記されていない。

前回、述べたように、次期倭王を目指して吉備氏が勢力を拡大しており、それが侮りがたいところまで来ていたとするなら、大伴・物部氏は、この吉備氏を次期倭王に選定しても良かったはずである。しかし、彼らは男大迹王を選んだ。それは、これまでの倭王たちが、全て出雲王家に繋がる者達であったからである。初代の崇神天皇から応神王家の最期を飾ることになる武烈天皇まで全てが、出雲王家の血筋であったということである。この血筋を守らなければならない立場にあった大伴・物部氏は、当然のこととして吉備氏を外したのである。

では男大迹王の血筋はどうか。書紀には応神天皇の「五世の孫」ということになっており、尤もらしい系譜も残されているが、この「五世の孫」なる記述についてはとかく問題とされ、継体天皇は全くの第三勢力だとする説も根強い。従って、皇統はこのとき切れたと云う説である。要するに、記紀の原典が編纂されたとき、男大迹王を無理やり応神天皇五世の孫に組み込んだという考え方である。

本稿の立場は、男大迹王は応神天皇の五世の孫ではないが、皇統に繋がる人物であるとの見方である。それは、皇子分封に繋がる地方豪族の一人であるとする考え方である。皇子分封とは、初代倭王である崇神天皇以降、倭国連合軍に服属した地方の国々のうち、主要国に対し当時の皇子達が、統治のために派遣されたとする当時の統治手法のことである。これは景行天皇紀にまとめて記述されているが、これとは別に崇神天皇紀にも越国に大彦命なる人物が派遣されたと記されており、これも皇子分封の一環と考えられる。このときの大彦命の末裔が男大迹王ではないかとするのが、ここでの見解である。

なお、大彦命なる人物は、古代ヤマトの誕生時に時代を超えて複数人登場するが、同一名称を複数人に使用した結果ではないかと見られる。稲荷山古墳の鉄剣にも、オワケの臣の上祖として「オホヒコ」なる人物名が記されており、当時の倭王家一族の長男に対する一般的な名称だった可能性はある。時代が下るとこれが「大兄」に替わる。

このような考え方が正しいとするなら、男大迹王は間違いなく皇統に繋がる人物ということになり、大伴・物部氏が選んだことは当然の事だったことになる。しかし、これだけでは次期倭王としての適格性に欠ける。それは雄略天皇以降の倭国内の情勢が極めて厳しいものになっていたと想定される問題に対する対応力である。具体的には吉備勢力の拡大であり、その他西国地方、更には九州の不穏な動きである。記紀にはそのような動向は全く記されていないが、記述の裏を読めば十分に想定されることである。このような吉備を含めた西国、更には九州の再征圧事業が男大迹王に課せられた重大な使命だったのである。その使命に耐えられるだけの力を、男大迹王は持っているのか、この条件こそが、大伴・物部氏の最大関心事であったはずである。両氏は男大迹王の動きを注意深く見守り、ここまで力が付けば大丈夫だろうと踏んだところで、この人物を迎えたと考えられる。

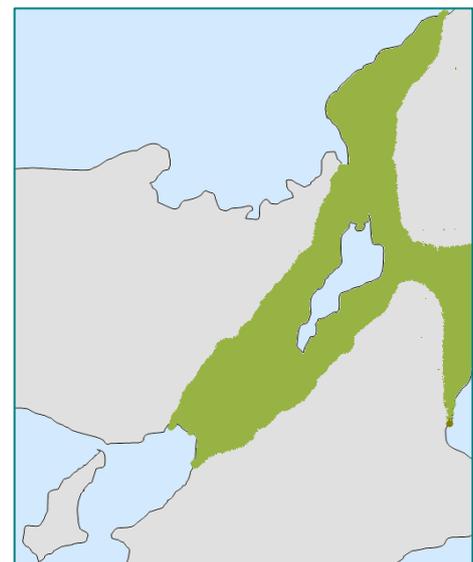
では、男大迹王の勢力はどの程度のものだったのかであるが、この問題は、記紀に列記されている継体天皇の妃の出自から窺うことができる。日本書紀によれば男大迹王の皇后とその妃は、次のように記されている。記載順に従って数字を頭に入れたが、恐らくこの順位は概ね格付けを示しているものと考えられる。なお、( )内は出自である。

- <皇后> <sup>たしら</sup>手白香皇女 (仁賢天皇皇女)
- <妃> 1 <sup>め</sup>目子媛 (尾張連草香<sup>むすめ</sup>の女)
- 2 <sup>わか</sup>稚子媛 (三尾角折君の妹)
- 3 <sup>おほ</sup>広媛 (坂田大跨王の女)
- 4 <sup>ま</sup>麻績娘子 (息長真手王の女)
- 5 <sup>ま</sup>関媛 (茨田連小望<sup>もち</sup>の女)
- 6 <sup>か</sup>倭媛 (三尾君堅槭<sup>かたひ</sup>の女)
- 7 <sup>は</sup>蕘媛 (和珥臣河内の女)
- 8 <sup>お</sup>広媛 (根王の女)

このようなリストの中で、皇后の手白香皇女は倭王としての即位後の妻となるため、恐らく九番目にあたる。従って、八番目までの女性は王位継承以前に妻としていたと考えられる。この中で男大迹王時代の正妻は目子媛とみられる。それは二人の間に生まれた<sup>まがりの</sup>勾大兄皇子と檜隈高田皇子が共に継体天皇の後継天皇として即位し、勾大兄皇子は安閑天皇、檜隈高田皇子は宣化天皇となったとされているからである。二番目の三尾角折君の妹稚子媛は、三尾が男大迹王の誕生の地、高島郡三尾であるところから、地元の娘を貰ったことになる。従って、彼女は尾張の目子媛の次なる妻として遇されていたとみられるが、史実としては彼女が最初の妻であったと考えられる。その後、尾張の目子媛が送り込まれたことで、格の違いから目子媛が正妻の座に就いたと想定される。

上記のリストの中で注目されるのは、坂田と<sup>おきな</sup>息長の豪族の女が二人入っていることである。この坂田と息長の地は、現在の湖北の長浜・米原地方に当たり、関が原の向う側に勢力を張る尾張氏にとって、彼らが味方であることの意味は重要である。恐らく、男大迹王と尾張氏の戦略的な判断があったものと考えられる。この湖北の豪族の内、息長氏は継体王家の中で、極めて重要な役割を果たすことになるが、この問題は後述することにする。

このような数多くの妃達を出した諸豪族は当然、男大迹王の協力者達であることから、この王が天皇に迎えられる前までの勢力範囲には、現在の越前、琵琶湖湖西、湖北、湖東、湖南、山城、河内といった地域が含まれ、更には尾張の勢力が扇の要のように後ろに控えていた。尾張がなぜこの男大迹王という、当時あっては、未だどのように転ずるのか分からないような男に賭けたのかという問題があるが、やはり貴種としての血筋の良さとその力量を見込んでのことであったと考えられる。尾張は応神天皇誕生のときにも重要な働きをしたが、継体天皇誕生にも同様の位置を占めた。大和の地から幾分離れているという、地の利の悪さから、どうしても権力中枢に座り続けることは出来



男大迹王勢力想定図

ないが、天下の情勢を極めて的確に捉え、機を見て俊敏に行動した結果が、時代の変わり目における頭抜けた尾張氏の働きと成ったといえよう。

これだけの大勢力に成長した男大迹王を見て、大伴・物部氏はこれなら西国制圧は何とかなろうと、判断したといえよう。ここに継体天皇が誕生する。ところが天皇は都を樟葉くすはに置き、更に山城の中を転々として約二十年間も大和には入らない。このような書紀の記述から、大和における反対勢力のために、継体天皇の大和入りが二十年間も遅れたとする説が生まれた。しかし、彼が保有する大勢力を考えれば、このような説は成り立たないことが、よく理解されよう。この二十年遅れの問題は、西国・九州再制圧に掛かった時間であったといえるが、記紀には全くこのことが触れられていないため、その実態は分からない。しかし、その手掛かりはある。

(つづく)

前回：[「古代ヤマトの遠景」\(65\) - 【継体王家の誕生\(1\)】 -](#)  
「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

## ■ 編集後記

トピックスでも紹介されたオリンピック、どんなドラマが展開されるか楽しみです。普段はあまりスポーツ観戦をしない私でも、このときばかりは気がそわそわし、ついテレビのスイッチオンの状態が夜遅くまで続きそうです。一方では、夏の節電が叫ばれている昨今、後ろめたい気持ちながらのオリンピック週間突入です。(HI)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)